ノースピア

菅野俊光

林は若い頃、出勤の途中で会社へ行きたくなくなることがよくあった。原因は会社が有楽町の駅から遠かったことと、労働時間が永いせいだった。

地下鉄がまだ開通していなかったので、有楽町の駅から永々と会社まで歩いたのだ。土曜日の午後の出勤の時など、半ドンで勤めを終えて駅へ向かう人達の流れに逆らって、会社へ向わなければならなかった。

当時林はスポーツ新聞社の製版工であった。敗戦から徐々にだが戦争の影が薄れ、人々の服装が華美になり始めて、林はそれに刺激されて、人並みに日曜日に仕事を休んで、ゆっくりどこかへ行ってみたい、と思うことがよくあった。

何しろスポーツ新聞社ときたら、ウイクデーにしか休むことが出来ず、自分の会社の新聞の製作が終わっても、毎晩午前二時までは、外注の宗教関係の新聞だとか、学校の新聞や繊維関係の業界紙や、林業関係の新聞の製作をこなさなければならなかったのだ。

そうした新聞の製作は総て、まだ手作業なのだった。つまり文選や小組や大組の工程もなのだった。

その日は午後出勤だったのだが、新宿で電車のドアが開いた途端に、林は無意識に、ヒョイとホームに下りてしまったのだった。

心に感じてすぐに体に応じた行動に出たのは、後で思うと雨の日の雰囲気のせいだったのではないかと思う。

だから、会社をサボルことはいけないことだと、潜在的には十分理解はしていたのだが、有楽町で電車を下りて、築地の新富町まで歩く道筋を想像すると、どうにも嫌で仕方がなかったのだ。

欠勤すればスタッフを組んでいる仲間に、相当影響を与えることは、判っていたのだ。例えば林の欠勤の穴を埋めるために、定時間で帰宅出来る者が作業を延長しなければならなかったし、班長は降版時間までに仕事を終えるために、他の版から最終時間まで残業をすることの出来る者を捜して来なければならないのだ。

そう思うとインクの匂いがする喧噪の中で、校正記者が気ぜわし気に新聞の校正を持って動き回り、作業員がピンセットを片手に大組をしていたり、活字の差し替えをしている風景が脳裏に浮かぶのだった。

林の仕事は過酷だった。一日十五時間以上もの立ち仕事を、会社に泊まりっぱなしで続けてい

ると、太腿が痛くなり、遂には足が上がらなくなるのだった。
それどころか、一度帰宅すると二度と会社へ行くのが嫌になるのだった。そんな現象は林にばかり起こるのではなく、同僚の殆どの者がそうなのだった。
そうまでからだを痛めつけて働かなければならなかったのは、低賃金の故なのだった。まだ最低賃金制度が確立していない時代だったからである。
林はホームの階段を下りながら、どこに行こうかと思案した。けれども改札口を出た途端に、風月堂へ行ってみようと思ったのだった。
風月堂は新宿のデパートの裏にある大きな喫茶店だった。いわゆる世にいう文化人達や、文化系の学生の溜まり場なのである。
面白いことに風月堂は新宿にありながら、水商売の女の姿をあまり見掛けなかった。当時は堅気と水商売の女性の違いがはっきりしていて、風月堂のような独特の雰囲気がある喫茶店には水商売のホステスは近寄りにくかったのかもしれない。
林は風月堂に入ると二階に上がった。二階は薄暗くて、煙草の匂いの染み付いているような客席があった。午前中なので客はまばらで、外人が一人と若い日本人の男が座っていた。勿論当時は外人といえば、アメリカ兵に決まっていた。
そのアメリカ兵はベトナム戦争で旗色が悪いせいか、日本へ進駐して来た当時とは違って、背を丸めていて何となくみすぼらしかった。
林はボーイが注文を取りに来て、コーヒーを頼み煙草を咥えると、やっと気分が落ち着いて来た。大きな喫茶店の人もまばらな間が抜けた空気に包まれていると、生活をすっかり忘れて気だるくなるような気分だった。
時間をかけてコーヒーを啜り、煙草をくゆらして紫煙を眺め、物思いに耽ることで、林はしみじみと幸せを感じていたのである。
それから十分も経った頃、隣側の席に中年の黒い皮ジャンパーを着た男が来て座り、物欲しそうな目付きで、林をしきりに眺めていた。
彼は傘を持って来なかったのか、肩の辺りが大分濡れていた。野獣のように大袈裟に身震いして、内ポケットから煙草を取り出すと、口に咥えて渋い顔をして辺りを見回していた。
目が合ったので林は思わず会釈をした。相手も気を良くした様子で、僅かに破顔すると頭を下げた。笑うと目付きがやさしくなる男だった。
午前中から風月堂に来ているところを見ると、職業を持っている人間ではないのかも知れない。譬えば自由業とかいう……。
そういう目で見ると、いかにも画家とか彫刻家というような、種類の人間らしかった。
彼はボーイにコーヒーとサンドイッチを頼むと、前を向いて瞑想していた。その様子はいかにも、創作の構想を練っている様に感じられた。
林は二本目の煙草と吸い終えると、何だか落ち着いて腰を下ろしていることに、苦痛を感じ始めていた。その原因は何することもしない倦怠感にあるようだった。
「いつもここへ来るんですか？」

突然隣席の男が話しかけて来た。
「ええまあね……たまになんですが、今日は会社をサボったんですよ」
すると相手はアッハッハアと大声を上げて笑って、判りますよその心理はといった。林はその時年上なのに、見下げた物のいい方をしない人だと思った。
小さな油虫が蠢いている。赤いビロード張りの椅子が気に入ったのだろうか。吹き抜けの一階から階下を見下ろすと若い男と女が話し込んでいて、二人は恋を囁き合っている表情ではなく、深刻な顔つきであった。
それで……と、男がまた話かけて来た。林が顔を向けると、今日はどうしますと訊いた。実はそれなんですよ、といいたかったのだが、初対面なので本音を吐くわけにはゆかなかった。
だから、その時もまた曖昧に返事をした。つまり林は彼にそれ以上接近して貰いたくなかったのだ。だが相手は無頓着な性格だと見えて、林の意向などかまわずに話しかけて来た。
「私はね朝鮮戦争当時横浜にあったという、死体処理施設のことを調べているんですよ」
「死体処理施設？」
相手の話の意味がよく判らなかった。
「朝鮮戦争当時、連合軍はノースコリアに釜山近くまで追い詰められたんですよ。それからマッカーサーが仁川に上陸して、形勢が逆転すると、戦場から死体を収容して一度日本へ移して傷口を縫合したり、顔に整形や化粧をして、失った手足に義手や義足を付けて本国へ送っていたんですよ。アメリカは日本と違って土葬でしょう。だから遺体が本国に戻れば、遺族が必ず棺の蓋を開けるんですよ。そうした死体を整形したり化粧をしたりする場所が、横浜にあったというんです」
林は相手の話に引き込まれて行った。死臭の匂いが漂う中で、マネキン人形のパーツみたいに義手や義足を担いで運んでいる光景が脳裏に浮かんだからだ。
然し……と林は相手を制した。
「今度のベトナム戦争では、朝鮮戦争の時とは違って、そうした死体処理施設が日本にあるという噂は耳にしませんよ」
「恐らく今度の戦争では、アメリカはタイのような戦場に近い第三国に、死体処理施設を拵えたんでしょう。朝鮮戦争の時のように、ベトナムは日本の隣国ではないし、気温が高い国ですから、遺体がすぐに腐敗して始末に困ると思いますね」
林は彼が言うように、死体処理施設があるとすれば、タイ国かも知れないと思った。
ベトナムの隣のラオスやカンボジアも、戦争に巻き込まれて、米軍の死体の整形どころではないだろう。他に死体処理施設を設置する国があるとすれば、タイ国に違いない。
林はテレビの画面で戦死者の死体を遺体袋に入れているのを見たことがある。
「死体処理も特需産業の一つですかねぇ」
「そうですよ。誰かが請負っているに違いない。朝鮮戦争ではそういう死体を縫合したり、化粧をしたりする仕事は高賃金だという噂でしたよ。失業対策の日雇いの仕事がニコヨンといって二百四十円の時代に三千八百円でしたからねえ。アメリカは昔の日本の軍隊とは違って、兵隊が死

んでも人権を尊重するし、戦争遂行のためにも、遺族の感情を大事にするから、遺体の処理を大事にするのでしょう」

林は相手の話に聞き入っていた。

「けれどもね、当時の話では死体をいじれば死臭が身に付きますから、幾度も風呂に入らなければならないということだと。私は霊の存在は信じてはいませんが、気味が悪いのでそれを紛らわせるのに、沢山酒を飲んだのだそうですよ。当然精神状態がノーマルで居られる訳が無いから、女も買っただろうし、仕事もよく休んだのにちがいありませんよ。だから死体処理で金を残した人なんか、居なかったろうと思います」

そういわれてみると、死体処理という作業は割のいい仕事だとは思えなかった。

「本当に工場のような死体の処理施設があったんですかね」

林は相手の男が、身の回りに居る種類の人間とは違うように思えてならなかった。

「それが朝鮮戦争当時のことを覚えている人に訊くと、確かにあったというんですけれどね、噂を辿っていくとプッツリと跡切れてしまうんですよ」

何だ単なる噂なのかと失望した。

「そうした死体処理施設があったことを捜し出して、どうするんですか」

「小説が書きたいんですよ」

「小説か……むずかしいんでしょうね」

「勿論ですよ、他人と同じ物を書いていたんじゃ認められないし、あまり奇ばかり追求してたんじゃ、薄っぺらな作品になってしまうし、作品が専門的だと普通の人は読まないし……どんな小説も最後まで読者に読んで貰うことが必須条件なんですよ。読んでいる途中で嫌になる作品では、たとえそれが高尚な作品でも価値は無いんです」

林は考えたことも無いむずかしい話なので、気を呑まれて沈黙してしまった。相手は運ばれてきたサンドイッチを鷲掴みにして頬張って、コーヒーを飲み終えると、やっと落ち着いたような顔付きになった。

若い女の子が階段を上がって来て、林の横を通ってアメリカ兵のところへ行き、二言、三言話すと二人で階下へ下りて行った。

「彼らも大変ですよ。ベトナムでは押され気味だし、本国では反戦運動が起こるし、サイゴンはベトコンのシンパだらけだそうじゃないですか。テト攻勢といって、ベトナムの正月には総攻撃があるそうですよ」

林は相手が広い見識を持っているので驚いた。林の周りの人間は、ベトナムでアメリカ軍が、枯葉剤やナパーム弾を落として庶民が苦しんでも、対岸の火事的な感覚しか持ち合わせていないのだ。

「話が遠いからこちらに来ませんか」

林は誘われるままに男の前に席を移した。すると相手は私は原田です。貴方のお名前はと尋ねた。

「林といいます」

勿論貴方は独身なんでしょうねと訊いた。
ええと頷くとそうでしょうね、世帯持ちの男ならば、ウイクデーの昼下がりにこんなところに来て、トグロを巻いては居ませんからね。
林は皮肉をいわれたのかと思って思わず原田の顔を見た。然し彼はいたって真面目な顔付きをしていた。
「反戦歌なんですけれどね、イマジンという歌を知っていますか」
「いえ知りません」
年齢の割には、原田は今時の歌をよく知っていた。だから原田は彼と同輩の知人よりも余程スマートに見えた。
「アメリカもこう戦争反対の声が大きくなったんじゃ、やりづらいでしょうね」
「そうですね」
林は同調はしたのだが、アメリカの国民の意向など全く興味がなかった。
「それにしても喫茶店には、反戦団体のベ平連も、出入りしているらしいじゃないですか」
林は思わず二階から階下を見下ろしたのだが、誰がベトナム平和連盟の人間なのか判らなかった。
すると原田が周りを見ても判りませんよ。彼等も公安から目を付けられると困るから、シークレットに行動をしているのだからといった。
「だって日本は言論が自由の国なんでしょう。それなのに、何で警視庁の公安部が動くんですか？」
すると、原田は笑って、敗戦国でも日本は全く無防備という訳ではありませんよ。各国の情報を収集したり、反社会的な人間や他国の諜報機関の目に付くような人間をマークしているんですよ。
ボーイが通ると、原田はコーヒーを追加注文した。
「貴方もコーヒーをもう一杯どうですか？」
「ええ……」
すると原田は、このオーダーは私に付けてくれといった。林は原田が初対面の人間なのに気前がよいのは、余程話し相手が欲しいからに違いないと思った。
「原田さんのお住まいはどこなんですか」
「世田谷です。あなたは？」
杉並の井荻ですと林は答えた。
「私は素浪人なんですが、貴方は仕事は何をしているのですか」
「マスコミですよ」
林はその時だけ少し胸を張った。
「記者さんなの？」
「いえ会社の中の仕事です」
「新聞製作の？」

林が広告ですよというと、頭脳労働者なんですねといった。林は仕事をそうした表現の仕方でされたことが無いので嬉しかった。
「私はこれから横浜に行こうと思うんですけど行きませんか」
「取材ですか」
林が尋ねると原田は黙っていた。けれどもすぐに饒舌に戻って、米軍の死体の処理施設以外にも調べたいことがあるんでねといった。
「一服したら出掛けましょう」
原田の言葉に林は思わず頷いた。
それから風月堂を出て渋谷に行き、私鉄の桜木町行きの急行に乗り換えたのだが、一つの傘に二人で入ったので、大分濡れてしまった。
桜木町から本牧行きのバスに乗ったのだが、冬の雨の日の夕暮れは早く、すでに街並みは暗くなり始めていた。
「雪に変わらなければいいのだけれど」
手足が冷たかったし、肩の辺りが絶えず寒かった。
「大桟橋に行ってみましょうか」
原田に訊かれたのだが、そこが戦後アメリカへ渡る戦争花嫁が利用したプレジデントラインの汽船の発着場であったことぐらいの知識しか、林は持ち合わせていなかった。
「あの辺りが象の鼻といわれている、横浜開港当時からある堤防なんですよ。雨の夕暮れの港は寂しいものです」
見渡すと赤レンガの倉庫群が見えた。原田に訊くと、明治時代に作られた生糸を保管する倉庫なのだということだった。
「商船テナッシイという、戦前のフランス映画を見たことはありませんか、雨の日の港を描いた作品では、あれが一番最高の傑作ですよ」
「戦前のフランス映画では、トルコ帽を被ったスリマン刑事が出て来る、ジャンギャバンの望郷という映画はみたんですけれどね」
「ペペルモコですか？」
「ええ」
それから原田はここが山下公園なのだと説明した。関東大震災の瓦礫で埋めて作った公園なのだそうである。だがまだ米軍の接収が解除されていなくて、外人ハウスになっているのだそうだ。
「朝鮮戦争当時の調査には、神奈川の新聞社や、市役所まで行ってみたんですけれど、そういう話は聞いたことがあるといわれるのですけれど場所は確認が出来ません」
「原田さんはそういう話を、どこで耳に入れたんですか」
「野毛のね、花柳という飲み屋なんですよ」
だが林はニュースソースが、飲み屋だと聞いて失望した。自分で小説を書かなくても、朝鮮戦争当時の話には話題性があって、会社で話しても、皆の興味を惹くと思ったのだ。
「けれどもね、朝鮮戦争を知っている人達に聞いてみると、必ずそういう噂は聞いたことがある

といいますよ」
それからホラと対岸を指して、あそこね米軍専用のノースピアという埠頭なんですよといった。
「朝鮮戦争の時には、アメリカ軍の戦略物資が、あの埠頭で積み出されたり、積み下ろされたりして、戦場で被弾して走行不能になった戦車や、火砲が頻繁に陸上げさらたんですよ。戦場から戻った戦車ですから、時には血が付いていたり、肉片の付いている車両もあったそうです。東京タワーはあの埠頭で下ろされたスクラップの戦車を溶かして拵えたのだそうですよ」
「ほう……」
林は返事はしたのだが、物悲しい暮色の迫る雨の風景と、寒さにやり切れなくなって、行きましょうよと原田を誘った。
雨が雪に変わった。林は歩きながら幾度も原田の横顔を覗き込んだ。その横顔は小説をかくということを除けば、普通の人間なのだった。
それから二人は南京街を通り、野球場の前を歩いて行った。
「この辺がね、幕末にアメリカ人になびくのが嫌で、自殺をした女郎のいた、岩亀楼という遊郭のあった跡なんですよ」
といっても公園になっていて、敷石の上にサヤサヤと雪が音を立てて降っていた。
「その岩亀楼で鑑札をもらわないと、ラシャメンになれなかったんですよ」
「ラシャメンになり手の女なんか、当時いたんですかね」
「いつの時代でも人は色々ですよ。江戸から応募した娘がいたそうですよ」
そういわれて外灯に光る石畳を見ても、幕末を想像することは出来なかった。
「野毛というところに行き付けの飲み屋があってね、ここまで来たんですから、ちょっと寄って行きたいんですよ。それとも歩き疲れましたか林さん」
年上の原田に林さんといわれると悪い気はしなかった。その行きつけの飲み屋というは、朝鮮戦争当時原田が米軍の死体処理場の話を聞いた店に違いなかった。
「野毛というところは、ここから余程遠いんですか」
「二、三キロかな」
「タクシーで行きましょうよ」
林は寒さに閉口して、一時も早く暖かい所へ行きたかった。けれども原田は返事をしなかった。だから林は金は俺が払うからタクシーで行きましょうと誘った。
考えてみると、原田は定職が無いのだから財布の中味が心細いに違いない。
「吹き降りでもないのに、洋服が湿っぽいんですよ。寒くてたまらないんです」
タクシーを止めて乗り込むと、林はいい訳みたいに独言を呟いたのだった。
桜木町から日の出町の駅の方向に行って、横丁に入ったところに、花柳という飲み屋はあった。開き戸を開けると三十年輩の着物を着て割烹着を付けたママが、斜めに座って一人でポツンと煙草を吸っていた。
それから顔が合うと、微笑を浮かべて立ち上がって、あらハラちゃんしばらくねえといった。
「あの女とうまくいっているの？」

「どうにか収まったよ」
「それなら何も仕事を辞めて、東京に引越すことなんかなかったのに」
ママはおしぼりを出してくれながら、林にこちら初めてねといった。林が頷くと原田はマスコミの人なんだと説明した。するとママが記者さんなのと尋ねた。
「とんでもない、新聞社の中の仕事ですよ」
「俺は最初はビールと煮物、林さんは？」
林は酒が飲めないのでいい訳をした。
「じゃあ、ソフトドリンクね」
「それと刺身を下さい」
畳敷きの縁台に腰を下ろして頼んだ。
「二人は家が近いの？」
「いえ新宿の風月堂で知りあって、先生が朝鮮戦争当時のことを調べに、横浜へ行くというので付いて来たんですよ」
原田のテリトリーなので、先生といって立てたのだが、ママはハラちゃんのことを先生だってといって笑った。
「どこの家でも回るものが回らないとモメるんだからね、早く仕事を捜して働いた方がいいわよ。今日はお金は大丈夫なの」
林はそれで原田という男の人物像が判った。

その後原田から会社に電話があったのは、八月の夜のことだった。旧盆で地方出の人達が田舎に帰ったので、林は定時間で帰る予定を、班長に頼まれて三時間の延長して、二十時に退社することにして、野球のナイターのスコアの差し換えをしていた時のことだ。
受話器を持つと原田は、忙しいですよね？と訊いて、会えませんかと静かに尋ねた。
「また風月堂ですか」
「何時に来ることが出来ますか？」
「仕事は八時に上がりますがインクだらけで真黒ですから、風呂へ入ってから行きます。だから九時半頃になってしまいますけれど」
「それまで待っていますよ」
風月堂の夜の客の顔ぶれは、昼間とは大分違って、ネクタイ姿のサラリーマンが多かった。
原田はテーブル代わりの表面を磨いた、大きな御影石の前に座っていた。林は原田さんと声を掛けて、二階には上がらなかったのですかと訊いた。
「ようしばらく、あいつが来るんで二階には上がらなかったんですよ」
どうやらあいつというのは、原田のかみさんらしいのだ。
「俺、働いているんですよ」
林が腰を下ろすと、原田は誇らし気にいった。だが、それを聞いても共鳴することは出来なかった。林には人間は生きている限り働くのは当たり前だという潜在意識があったからだった。

「何の仕事ですか」
「出版社のね……」
「編集ですか」
「いや、医学関係の本の校正ですよ」
だが顔付きが曖昧だった。林はその顔に割り切れないものを感じた。
忙しいですかと原田が今度は訊いた。
「ええ夏はナイターがあるから、冬よりも忙しいんですよ」
原田に尋ねられると林はそう告げた。林が答えると、原田は羨ましそうな顔をしていた。林は初対面の時と違って、原田に対して尊敬を失っているような自分を感じた。
「ああ、来た来た」
原田の視線を辿ると、若い女が近寄って来るところだった。すると身なりよりも先に、足元の真新しい白いパンプスが目に付いた。
「大分待った？」
女は林に会釈をすると原田に尋ねていた。えらの張った四角い顔立ちの芯が強そうな女だった。
「いや、そうでもない」
原田は女房に余程の遠慮があるのか、おどおどした様子で答えていた。
「洗濯屋へコートを持って行ってくれたの」
女には微かだが栃木訛りがあった。それにブラジャーが外れているらしく、立ったまま、しきりにブラウスの内側に手を入れていた。
「こちらがいつも話をする、ヘラルドスポーツの林さんだよ」
原田は女房に林を紹介した。けれども原田の知合いの中では、林は特別な人間らしく、得意な様子だった。
「林さん、女房なんです」
「幸子です。いつもお世話様です」
それから原田に、出ましょうといった。
「あそこへ行くのか？」
「ええ、おなかが空いちゃった」
すると原田が林さん一緒に食事をしませんかと訊いた。林は会社で済ませて来ましたからといって断った。
林が警戒したのは、横浜へ行った時に野毛の飲み屋の支払いを林がしたからだった。
その後原田に会うことは無かった。彼からの電話も無かったし、林から彼のアドレスに手紙を出すこともなかったからだ。
けれども林はその後も一人で、人を眺めに風月堂へ行っていた。二階から階下を見下ろす時、原田を思い出すこともあったが、心の中ではすでに彼は行きずりの人として処理していて、懐かしさを感じることは無かった。
その後林はヘラルドスポーツ新聞社から、石油関係の業界紙に籍を移していたのは、人並みに

朝会社に出勤して、夜は家に戻って眠る生活をしたかったからだった。
その頃はすでに南ベトナム政府は崩壊して、ボートピープルの騒ぎも収まっていた。
そしてある年の春先のことだったのだが、林は会社の慰安旅行の下見に鬼怒川温泉に同僚と出掛けた。
他の客と一緒に送迎バスを下りて玄関に入ると、着物姿の女中達が並んで出迎えてくれたのだが、その中の一人が林をしげしげと眺めているのに気付いた。だがその女中は林の記憶にある顔ではなかった。
夕食を食事処で摂って、同僚よりも先に廊下に出ると、先程の女中が人待ち顔に佇んでいた。
「お客さん、前にお目に掛ったことがありますね」
「いや、鬼怒川温泉は初めてなんだけれども」
食事時間のせいか辺りに浴衣姿の宿泊客の姿はなかった。
「新宿の風月堂です」
風月堂？と林は訊き返した。風月堂にはよく行ったのだが……親しくなった異性は居なかったはずだ。
「覚えていませんか？」
林が頷くと原田と一緒だったのだといった。
「ああ、奥さんか、彼はどうして居ますか」
「あの頃、私は一緒には暮らしていましたが神田川だったんですよ」
何か沢山嫌な思い出がある様子だった。
「彼は今でも出版社で、校正をやっているのかな」
「校正係なんかじゃありません。著者や印刷会社に校正を運んでいただけなんです」
何だ、と林は思わず呟いた。
相手は和服を着ていて、着物の着こなしがうまいので、つい魅せられてしまった。相手も林の視線を意識しているらしく、しきりに目をしばたいて、女の色気を発散させていた。
「あの人は只の怠け者なんです」
「だって小説を書くんでしょう」
「いくら売れない小説を書いても仕方がないでしょう。現実は小説みたいに絵空事ではないから、月末になれば家賃も払わなければならないし、公共料金の請求も来るんだから」
「彼が書くといっていた、朝鮮戦争当時の米軍の死体処理の話はどうなりましたかね」
「掛け声だけで、本にはなっていませんよ。私はあの人と他人になって久しいから、小説がどうなったか知りません」
それから相手は、忙しくなるから後で会いましょうといった。
「いつ？」
「仕事が十一時半頃終わるから、タクトという喫茶店へ来て下さい」
林は一人になるとまた大風呂へ行った。
部屋に戻ると同僚が散歩に行かないかと、いって誘ったが断った。同僚は俺は飲みに行って来

るといって出掛けて行った。林は凝っと寝床の中で時の来るのを待っていた。
着物を着替えた相手は急に老けて見えた。林は相手の前に座ると、千円札を二枚むき出しで悪いがといって出した。すいませんと相手は嬉しそうな顔をして受け取った。千円札が十分値打ちがある時代だった。
「なぜ温泉場で働く気になったの？」
「実家に戻っても両親は亡くなっていないし、私の居場所が無いからですよ」
「貴方とは風月堂で会ったんですけれど、名前を忘れてしまったんです」
「私、高橋幸子といいます」
俺は林だというと、幸子は知っていますと答えた。
「貴方は原田の誇りだったんですよ」
「俺が、なぜ？」
「林さんが新聞社の社員だからですよ。あの人は孤独で友達が居ないんです、もう五十男なんですよ。この先どうするのかしら」
「横浜の野毛の飲み屋でも行けば、彼の消息が判るかも知れませんね」
「そうね、酒好きだし寂しがり屋なんだから、飲み屋にでも行けば情報が入るかもしれませんよ」
二人で一時喫茶店に居て、それから小さなバーに移ってその夜は終った。幸子は別れ際に林が何もしないことを、しきりに不思議がっていた。あれはもしかすると、幸子のベッドへの誘いだったのかも知れない。
その後社員旅行で会社全員で鬼怒川温泉に行った時には、ホテルが全館満室で幸子と語り合う暇はなかった。だから廊下でその内に、ゆっくり会いましょうという口約束だけはしたのだった。けれども幸子とはそれきりになってしまった。

それから林が横浜の野毛の花柳に行ったのは、鬼怒川温泉のホテルで幸子と再会してから十年近くも経って、バブル景気が崩壊した後のことだった。
横浜で趣味の方の会合があり、その場が山下公園の近くのホテルだったこともあって、開宴時間よりも大分前に出掛けて行って、ミナトミライの大観覧車のシルエットを眺めたり、大桟橋に行ったりしたのだった。
だが対岸のノースピアと呼ばれていた埠頭は、日本に返還されてから久しく、今はねずみ色のリバティ型と呼ばれていた貨物船の姿もなかった。
それでも趣味の方の会合の二次会には行かずに、野毛の花柳に行ってみようと思ったのは、かつてのノースピアと呼ばれていた埠頭を眺めて、突然原田を思い出したからだった。
野毛の花柳という飲み屋は、原田に連れて行かれてから何十年も経っているので、既に無くなっているかも知れなかった。けれども林はその時野毛に行ってみたくてたまらなかったのだ。
初めて原田と横浜に来た時には、林は歩くのが億劫でタクシーに乗ったのだった。けれども今度は横浜の匂いを満喫したくて歩いたのだった。
確かこの辺りだった……と思った小路を、林は散々探し回った末に、トタンのふぐ料理という

錆が浮いた古い看板を見て、ここに違いないという確証を持ったのだった。
林が素透しガラスから覗いてみると、薄暗がりの中で老婆が背を丸めてお茶を飲んでいるのが見えた。林はママが老け込んでしまったのを見て、時が足早に立ち去って行ったのを痛感したのだった。
それから林が思い切ってガラス戸を開けると、突然の客にママは戸惑っていた。
「大分以前、原田さんにこの店に連れて来て貰ったことがあるのですけれどね、ママ」
「原田さん？ハラちゃんのことじゃないの、ちょっとお、随分古い話だわねえ……あの人生きているのかしら」
「ホウ」
林は思わず溜息を吐いた。
「何にします」
「ビールを貰うよ、飲めないからママ助けてくれないかなあ」
店の中は原田と来た時のまま古くなって煤ぼけていて、客が持ってきてくれたという大きなセルロイドのキューピーが、首に毛糸で編んだマフラーを巻いていて、冴えない色のコケシも埃の積ったガラスケースに入って、あの時のままだった。
「あんたどこから来たの？」
「東京だよ」
「東京からわざわざウチに来てくれたの」
「趣味の会合があって、山下公園の傍のホテルに来たんだ。それで懐かしくて寄った訳」
「あんた偉いんだね」
林は別に自分が偉いとは思わなかったが、反論はしなかった。するとママが表通りを人が歩いているかと訊いた。林が人通りは少ないようだと答えると、バブルの崩壊のせいで、暇なのよと答えた。
「ハラちゃんが来てくれていた頃は、表を歩く人なんか当てにしたことは無かったのだけれど、すっかり客の層が変わっちまったんだよ」
そういえば、店の前を通る人の足音も聞こえなかった。その原因は港湾施設が機械化されて人手がいらなくなって、港に活気が無くなったことが原因なのだった。
林が二杯目のグラスを空けかけた時、五十輩のジャンパー姿の男が入って来た。その男はすでにどこかで下地を入れて来たらしく、赤い顔をしていた。
「オヤ、今日は珍しいお客さんばかり来る、しばらくね」
「久し振りに場外馬券を買うのに野毛に来たんでね、ストレートで家に帰りたくなくて寄ってみたんだよ」
「このお客さんも昔ウチに来てくれたことがあるといって寄ってくれたのよ」
その男はまじまじと林を見詰めていたが、覚えが無いなあといった。
「ハラちゃんと来たことがあるんだって」
「ハラちゃんなら知っているよ。九州の出でいい処の倅でね、この店でよく行き合ったよ。一度

奴が馬で大当たりをして、実家へ連れて行ってくれたことがあるんだ」
原田が良い処の息子だったということは初耳だった。林が風月堂で原田に会った頃は、つむじ風に吹きまくられた枯葉みたいに、幸子の前でキリキリ舞いをしていたのだ。
「奴がレースに持券を五枚突っ込んだら二十何万円かになったんだ。あの頃の二十何万円かは大きかったんだが、田舎へ行ってみたいが敷居がとても高くて、一人じゃ戻れないから一緒に来てくれないかと頼まれた訳よ。それで横浜から寝台車に乗って、他の乗客の迷惑にならないようにデッキに座り込んで飲みっ放しでよ。あの晩はママも心付けを貰ったはずだぜ」
そんなことは、随分昔だから忘れちゃったよ、とママはいった。
「俺は今でも競馬をやっているが、大穴なんか取ったことが無い。今日だって馬券は買ったけれど、三千円ぐらいの儲けにしかならなかったよ」
男の話は原田から外れて行った。

「その後原田さんの消息知りませんか」
「一頃は横浜でタクシードライバーをやっていたけれど、それからどうしたかな」
「判りませんか……むしょうに懐かしくてね、再会したいんですよ」
サア？と、男はいったのだが、原田のことには興味がないらしくて、ママにしきりにその日の競馬のレース展開を説明していた。

林が極く最近山下公園へ行ったのは、フランス名画特集というＤＶＤを買って、商船テナッシイという映画を見たからだった。
けれども帰りに野毛の花柳に寄ろうという気にはならず、中華街でサマーメンを食べて帰るつもりでいた。何しろこの前花柳へ行った時から、また十年も過ぎてしまったからだ。
だがその日は乗船テナッシイという映画のことから、しきりに原田のことを思い出していた。それほど関係が深くなかったのに、彼を思い出すのは、一種の祟りかも知れない。